

日本語母語話者と日本語学習者の 意見文におけるダロウの使用状況

小森万里

◆要旨

意見文を書く際、日本語母語話者はダロウをよく使用するが、日本語学習者はあまり使用しないことが先行研究で指摘されている。ダロウの非用は、書き手が独断的に意見を述べているという印象を与えることがあるため、その適切な使用が求められる。そこで、本稿ではまずダロウの意味・機能と用法を整理し、次に従来の日本語教材ではダロウの説明が十分になされてこなかったことを指摘した。そして、日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるダロウの使用について、学習者が多用しがちな「と思う」文と比較しながら、その使用数、共起表現、文章構成の点から分析し、ダロウが意見文においてどのように使用される表現なのかを明らかにした。

◆キーワード

意見文、ダロウ、「と思う」、断定表現、配慮表現

◆ABSTRACT

In previous studies, the view has been expressed that Japanese native speakers often use Daroo. However, Japanese learners do not utilize it much in their opinion essays. Those who do not use Daroo have given the impression that writers assert their opinions arbitrarily. Thus, it is important to use the expression properly. In this paper, firstly, the meanings, functions, and uses of Daroo are defined. Secondly, the ways in which Japanese textbooks deal with these expressions are examined. Thirdly, the usages of Daroo in the opinion essays of Japanese native speakers and Japanese learners from the perspective of number of uses, co-occurring expressions and the structure of texts are examined. Subsequently, these are compared with To Omou, which Japanese learners frequently use. Finally the use of Daroo in opinion essays is clarified.

◆KEY WORDS

opinion essays, "Daroo," "To Omou," assertive expression, considerate expression

The Usage of *Daroo* in the Opinion Essays of Japanese Native Speakers and Japanese Learners

MARI KOMORI

1 はじめに

伊集院・高橋 (2010, 2012)、野崎・岩崎 (2014)、小森 (2015) などによると、日本語母語話者 (以下、母語話者) と日本語学習者 (以下、学習者) の意見文において、母語話者がよく使用する意見述べ表現と学習者のそれとは使用傾向が異なるものがあるという。その一つは、ダロウ^[註1]の使用であり、伊集院・高橋 (2012)、野崎・岩崎 (2014) によれば、学習者の使用は母語話者に比して少ない。ダロウを使用しないことは、それにより非文法的な文になるわけではないが、独断的であるという印象を読み手に与える場合がある。

(1) は学習者が書いた意見文からの抜粋^[註2]であるが、文末にダロウを付加した (1') と比べると、言い切りの形である (1) のほうが、英語の人気の高いのは当然であると書き手が一方的に決めつけているような印象を与える。

- (1) 歴史や現代の世界を見れば、なぜ英語がそれほど人気が高いのか、簡単に理解できる。
- (1') 歴史や現代の世界を見れば、なぜ英語がそれほど人気が高いのか、簡単に理解できるだろう。

日本語教育ではダロウは概言を表す表現として提示され、「と思う」の類義表現だと捉えられがちであることや (庵 2009)、学習者の意見文では「だろう」が使用され得る箇所に「と思う」が多用される (野崎・岩崎 2014) ことなどが指摘されている。これは、意見文におけるダロウの使用のしかたについてこれまで十分に説明されてこなかったことが一因なのではないかと考えられる。

本稿では、まず、先行研究をもとに意見文におけるダロウの意味・機能と用法を整理し、次に、ダロウが市販の日本語教材でどのように説明されているかを考察する。そして、母語話者と学習者によるダロウの使用状況について、「と思う」の使用状況と比較しながら分析し、意見文におけるダロウの使用のしかたについて述べる。

2 先行研究

2.1 アカデミック・ライティングにおける意見の述べ方に関する先行研究

Hyland (1994, 1997) は、アカデミック・ディスコースはただ客観的で情報的なのではなく対人的スタイルで書かれるものであり、読み手を説得できるような方法で書く必要があると述べ、それを達成するためには読み手に対し適切な敬意と慎重さを伝えなければならないとしている。日本語では、その一手段として、適切な文末表現を用いることが必要となるであろう。

小森 (2015) では、引用動詞を用いた意見述べ表現について、アカデミック・ライティングの中でどのように使用されるかが論じられている。それによれば、意見述べ表現には、命題内容に対する書き手の全面的なコミットメントを表すタイプのもものと、命題内容に対する書き手のコミットメントを保留するタイプのもものがあり、これらを文脈に応じてバランスよく使い分けることが重要であるとされる。しかし、ダロウがどちらのタイプの文末表現であり、アカデミック・ライティングでどう使用されるのかは明らかにされていない。

2.2 ダロウの意味・機能と用法に関する先行研究

2.2.1 ダロウの意味・機能

先行研究において、ダロウがもつ意味は、「判断形成過程」を表すとすると「間接的認識から導き出した判断」を表すとするとするものがある。

森山 (1992) は、ダロウは判断の形成過程にあることを表し、結論を出さない述べ方をする形式であると述べている。一方、「間接的認識から導き出した判断」を表すとするのは、宮崎 (2002) や日本語記述文法研究会編 (2003) である。これらの先行研究では、ダロウは想像や思考という間接的な認識によって命題内容を真だと話し手が判断していることを表す形式であるとされている。

本稿ではダロウの意味について後者の立場をとる。それは、ダロウの命題内容が判断の形成過程を表す表現や不確かさを表す表現と共起できないことによる。例えば、(1'') の「なぜ英語がそれほど人気が高いのか、簡単に理解でき

る」という命題内容に判断形成過程を表す表現や不確かさを表す表現を付加した場合、ダロウ文と同じ意味に解釈することはできない。

(1') 歴史や現代の世界を見れば、なぜ英語がそれほど人気が高いのか、簡単に理解できる {だろう／?と考えているところだ／?かもしれない}。

つまり、書き手は命題内容について確かだと判断をしているが、想像や思考による間接的な認識であることがダロウによって表されるために、言い切りの形ほど独断性が感じられないといえるのではないだろうか。

このようにみると、書き手が自身の判断をどう読み手に提示するかは、直接的認識による判断か、間接的認識による判断か、また、命題内容について書き手が確かなものだと捉えているか、不確かなものだと捉えているかという点が関わっていると考えられる。

本稿では、ダロウの意味を「間接的認識によって話し手が命題内容を真だと判断したことを表す」とし、その機能を命題内容へのコミットメントを弱めることと捉える。

2.2.2 ダロウの用法

ダロウの用法については、専門的検討を経た上での意見述べ表現であり断定回避を表す婉曲表現ではないと分析したもの（蓮沼 2015）、発話機能によっては配慮表現になると分析したもの（牧原 2015）、主張を控えめにする断定回避の用法があるとするもの（日本語記述文法研究会編 2003）などがある。

本稿では、ダロウには①間接的認識による検討を経た上での断定表現の用法、②主張を行う際の読み手への配慮表現の用法の2つがあると捉える。

まず、前者の用法については、仮定条件の帰結部分にダロウを付加する例があることが根拠となる。条件文では、ある条件下で命題が成立するかどうかを想像や思考を通して判断し、その帰結が真であると書き手が捉えていることが述べられる。また、不確かさを表す副詞と共起することができないことから、間接的認識による思考を経た上での断定表現であると考えられることができる（*は非文法的な文であることを表す。また、例文中の下線は筆者による）。

(2) 会議の開催地が変われば、使用言語も変わるので、不平等感がないだろう。

(2') *会議の開催地が変われば、使用言語も変わるので、{もしかすると／ひょっとして} 不平等感がないだろう。

後者の用法については、相手との間に共通認識が形成されていない場合や、相手の意見に反論する前に部分的賛意を示す場合にダロウの使用が可能であると牧原（2015）が述べているように、読み手と書き手の判断が異なる可能性があることを示す際に配慮表現のダロウが使用されると考えられる。例えば（3）は母語話者の例である。反対意見に反論する前の、部分的賛意を示す譲歩の文にダロウが使用されている。

(3) 確かに、効率を考えるなら英語を共通言語にしておくべきだろう。

このようなダロウの2つの用法が日本語教育の現場で十分に説明されてこなかったことが、学習者のダロウの使用の少なさにつながっているのではないだろうか。3節では、市販の教材でどのように扱われてきたのかを考察する。

3 教材分析

『日本語教材リスト No.45』（凡人社）の「留学生向け専門分野」「作文」「文法」のいずれかに掲載されているもののうち、1) 特定の言語を対象とする学習者を対象としておらず、2) 教材名や前書きなどで教材の対象として日本語学習者が含まれていることを明らかにしている教材46冊において、ダロウがどのように扱われているかを調べた。

その結果、ダロウについて記載があるのは14冊で、そのうち、A) 文型・例文のみが掲載されているものが5冊、B) ダロウの意味について、「自分の推測を述べる時に使います」など簡単な説明が記載されているものが8冊、C) 文型・例文・意味についての簡単な説明に加え、アカデミック・ライティングでの使用のしかたについて説明しているものは1冊であった。

C) は、友松 (2008) である。本教材では、客観的に書く方法の一つとして感想や想像を入れずに事実をそのまま書くことを挙げ、ダロウは避けたほうがよい文末表現の一つとして紹介されている (p.122)。また、別の頁では意見を述べる際によく使われる文型としてダロウが紹介されている (p.131)。しかし、ダロウを使用せず書く必要がある場合と、ダロウが使用できる場合の使い分けについては説明されていない。

野崎・岩崎 (2014) は、中国語母語話者はモダリティの中でダロウの使用が突出して困難であることと、「と思う」を多用することを指摘しており、ダロウの使用のしかたを指導すれば、「と思う」の多用が避けられるだろうと述べている。学習者によるダロウの適切な使用を促すためには、ダロウを意見文の中のどこでどのように使用すればよいのかを具体的に示す必要がある。

そこで、4、5節では、学習者と母語話者の意見文におけるダロウの使用状況について、「と思う」の使用状況と比較しつつ分析することにより、ダロウの談話レベルでの具体的な使用のしかたを明らかにする。

4 調査の概要

4.1 調査対象者

調査対象となった学習者は、2015年度春学期にA大学で開講された短期留学生対象の中上級レベル「文法・語彙」授業の履修者である。出身国・地域と人数は、台湾4名、ドイツ4名、オーストリア2名、アメリカ1名、インドネシア1名、韓国1名、ブルガリア1名、ベトナム1名、ロシア1名の合計16名であった。日本語学習歴は1年9か月～17年8か月で、日本語のレベルは日本語能力試験の旧3級合格～N1合格程度であった。本科目が選択科目であり上下1レベルの範囲内の学習者であれば受講可能であったため、当大学のプレースメントテストで中級、中上級、上級と判定された学習者が含まれている。

一方、調査対象となった母語話者は大学教員16名である。大学での教育歴は2か月～32年であり、専門分野は日本語教育学、日本語学、日本文化学であった。母語話者に対する調査は2016年5月～6月に行った。

4.2 調査方法

学習者と母語話者に作文課題を課し、その作文データを比較した。学習者には課題a、bから1つ選びA4サイズに26行の罫線が引かれた用紙に13行以上書くよう指示した。学習者の意見文の文字数は294字～726字であり、すべての学習者が30～60分で意見文を書き上げた。学習者の多くが課題bを選んでいたので母語話者に対しては課題bを与え、できるだけ学習者と同じ条件になるよう、600～800字で30～60分以内に書くよう指示した。

課題文a

日本の小学校や中学校では「いじめ」が問題になっています。最近の小学生や中学生のことについて、あなたが知っている国や地域の状況を説明してください。そして、その状況がこれからどうなっていくと思うか、あなたの考えを書いてください。

課題文b

「国際会議では英語を使った方がいい」という意見があります。このような意見の短所と長所を説明してください。そして、この意見に対するあなたの考えを書いてください。

4.3 分析方法

収集した作文データからダロウと「と思う」が文末にある文を取り上げ、使用数、共起表現、文章構成などの観点から使用状況を分析、考察した。

5 調査の結果と考察

5.1 使用数

学習者の作文データは総文数213、その中で文末に意見述べ表現が使用されていたのは92例、そのうちダロウが7例であった。なお、学習者によって最も多く使用されていた表現は、野崎・岩崎 (2014) の結果と同様、「と思う」(26例)であった。一方、母語話者の作文データは総文数244、その中で意見述べの文

末表現が113例、そのうち最も多く使用されていたのがダロウで、21例であった。なお、母語話者による「と思う」文は3例のみであった。

また、ダロウの使用率は、学習者が16名中4名(25%)、母語話者は16名中10名(62.5%)であり、学習者で使用する者は多くないことがわかる。「と思う」については、16名中15名とほぼすべての学習者が使用していた。

次に、意見述べの文末表現の異なり語数を調べたところ、学習者は24、母語話者は37であった。母語話者は学習者に比べ、より多様な意見述べの文末表現を使用しているが、その多様な表現の中でダロウが半数以上の母語話者によって使用されており、使用数も最も多かったことは特徴的である。

5.2 共起表現

5.2では、ダロウの具体的な使用状況について共起表現の観点から考察する。

課題となった意見文は、テーマに対して書き手がどう考えるかという、思考・想像の中でとらえた事柄を表すタイプの文章である。このような意見文に出現するダロウの共起表現として最も多かったのは、書き手の主張を表す「といえる」、「べき」、「必要になる」などの表現で、母語話者の使用例21例中10例(47.6%)がこれらの表現と共起していた。次いで条件を表す表現が多く、母語話者によるダロウの使用例21例中9例(42.9%)が共起していた。

例えば、(4)は主張を表す表現にダロウを付加した母語話者の例である。この場合、言い切りの形では書き手の一方的な論であるというニュアンスが生じやすい。したがって、書き手とは異なる意見をもつ読み手もいることを意識していると示すために、配慮表現としてのダロウを付加していると考えられる。また、(5)は、英語が会議で使用されるという条件下では様々な問題が提起される(ことについて書き手は真だと考えている)ということ述べており、間接的認識による検討を経た上での断定表現の用法だといえる。

- (4) 会議には、伝達技術が優れた者より、豊富な知識と判断力を持つ者が参加すべきであろう。英語が達者というだけで選ばれた場合、上辺だけの議論になり、長い目で見れば効率的であるとはいえない。
- (5) しかし、英語が会議の場で使用されると様々な問題が提起されるだろう。

なお、学習者の意見文にダロウが少ないのは、ダロウと共起しやすいこれらの表現の使用数が少ないことによる可能性がある。そこで、学習者と母語話者の意見文における主張や条件を表す文の出現数を調べたところ、学習者の意見文では主張文が23例(総文数の10.8%)、条件文が23例(同10.8%)であるのに対し、母語話者の意見文ではそれぞれ35例(総文数の14.3%)、37例(同15.2%)であり、学習者の使用数が著しく少ないわけではないとわかった。このことから、学習者の意見文はダロウと共起しやすい表現が少ないのではなく、母語話者がダロウを使用する箇所で使用していない、あるいはダロウの代わりに別の表現を使用している可能性が考えられる。

5.3 意見文のマクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用状況

5.3では、意見文の文章構成上、母語話者がダロウをどのような箇所ですらうのかについて、学習者が多用する「と思う」と比較しながら考察する。

表1はマクロ構成^[註3]におけるダロウと「と思う」の使用状況である。ダロウは学習者が本論にしか使用していないのに対し、母語話者は序論、本論、結論すべてに使用している。また、「と思う」は学習者が特に序論と結論で多く使用しているのに対し、母語話者は序論、本論、結論に各1例しか使用していない。

表1 マクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用数

マクロ構成	序論		本論		結論		合計	
文末表現	NNS [※]	NS [※]	NNS	NS	NNS	NS	NNS	NS
ダロウ	0	1	7	13	0	7	7	21
と思う	9	1	4	1	13	1	26	3

※学習者をNNS、母語話者をNSとする。

以上のように、マクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用には学習者と母語話者で異なる傾向があった。このような相違の詳細を探るために、ミクロ構成^[註4]における使用状況を考察する必要がある。

5.4 意見文のマイクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用状況

5.4ではマイクロ構成における学習者と母語話者のダロウと「と思う」の使用状況について考察する。

5.4.1 ミクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用箇所と使用数

マイクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用箇所と使用数を表2に示した。まず、学習者と母語話者によるダロウの使用については、表2の波線部のように、本論のサポーター・センテンス（以下、SS）において、トピック・センテンス（以下、TS）の根拠・理由を述べる際や言い換えを行う際に使用している点が共通している。両者の相違点は、学習者がこの2つの場合しか使用していないのに対し、母語話者はより多様な箇所で使用していることである。

次に、「と思う」の使用については、表2の二重線部のように、序論で意見文の展開を述べる文や、結論で書き手の立場表明を行う文で使用している点が共通している。相違点は、学習者の「と思う」の使用が、母語話者が使用しない文脈にもみられることである。このような箇所（例えば、序論における立場表明の文や事実を表す文、本論におけるTSなど）では「と思う」を使用しないと指導することで、この表現の多用を回避できる可能性がある。

また、表中の破線部で示したように、結論で主張をする文と、なぜその立場をとるのかという理由を示す文において、学習者は「と思う」を使用し、母語話者はダロウを使用していることがわかる。このような箇所でのダロウの使用

表2 ミクロ構成におけるダロウと「と思う」の使用箇所と使用数

NNS	ダロウ7	本論SS* (根拠・理由6、 <u>言い換え1</u>)
	と思う26	序論 (展開4、 <u>立場表明2</u> 、 <u>事実2</u> 、 <u>立場の理由1</u>)、本論 (TS*3、SS1 (評価))、結論 (<u>主張8</u> 、 <u>立場表明3</u> 、 <u>立場の理由2</u>)
NS	ダロウ21	序論 (背景説明1)、本論 (TS1、SS (根拠・理由6、 <u>言い換え3</u> 、例1)、CS*2)、結論 (<u>主張2</u> 、 <u>立場の理由2</u> 、 <u>補足2</u> 、 <u>譲歩1</u>)
	と思う3	序論 (<u>展開1</u>)、本論 (CS1)、結論 (<u>立場表明1</u>)

※サポーター・センテンスをSS、トピック・センテンスをTS、コンクルーディング・センテンスをCSとする。

を促すことにより、「と思う」の多用を避けることができると考えられる。

5.4.2 本論におけるダロウの使用文脈

表2から、母語話者は本論と結論の多様な箇所ではダロウを使用していることがわかる。5.4.2では、本論におけるダロウの使用文脈の詳細を考察する。

(6) は、TSで英語を国際会議の共通言語にした場合の長所を挙げ、SSでなぜそれが長所だと考えるのかという理由を述べている。(7) は、TSで英語が母語であるかどうかによって会議における優位性が決まるという短所を指摘し、SSにおいてTSの言い換えを行っている。また、(8) はTSで英語を国際会議の共通言語にした場合の短所を述べ、SSでその例を示している。これらの例ではダロウと不確かさを表す「かもしれない」を入れ替えると同じ意味に解釈できないことから、間接的認識を経た断定表現の用法であるとわかる。このように、母語話者は本論において、TSを補強する文にダロウを使用している。

- (6) 二点目は、情報を的確に受信者に伝えることである。通訳者が間に入ることで、発言者が意図した通りには伝わらない可能性があるため、発言者自身が受信者に理解可能な言語で伝えることが肝要であろう。
- (7) 一方、短所は英語を母語とする人にとっては優位で、そうではない人にとっては下位の差が出てしまうことである。母語話者にとっては、細かな点まで配慮が行き渡り、伝えたい内容を正確に伝えることができるが、そうでない人にとっては難しいだろう。
- (8) 一方で、通訳を入れず、発話者が直接英語で話すとなると、非母語話者にとっては圧倒的に不利である。事細かに内容を伝達しなければならない場面や、討論が必要な場所では、特にこの問題が顕著になるだろう。

一方、学習者の意見文では、同様の文脈において言い切りの形が使用されているために独断的な議論であるという印象を与えるものがある。(9) は学習者の例で、国際会議の共通語として英語を使った場合の短所とその理由を述べている箇所である。この理由を述べる文に間接的認識による断定表現のダロウを

付加することにより、命題内容への書き手のコミットメントを弱め、一方的な議論だと捉えられるのを回避できるのではないか（ ）内は筆者による）。

(9) しかし、そうしたら、英語義務教育がない国に不利になる。アメリカ・イギリス等はまだ英語にすごく慣れているけど、アジアではその場合ではない（だろう）。

以上の考察から、本論ではTSを補強するための理由・根拠、言い換え、例を述べるSSなどで使用するのが効果的だと学習者に示すことが、ダロウの適切な使用につなげる一つの方法になり得ると考えられる。

5.4.3 結論におけるダロウの使用文脈

5.4.3では、複数の母語話者が使用していた結論におけるダロウの使用文脈について考察する。5.3で、母語話者が結論でダロウを使用するのに対し、学習者は使用していないことを指摘したが、これは、学習者と母語話者の間で結論に書かれている内容に違いがあることによる可能性がある。そこで、学習者と母語話者双方の意見文のマクロ構成、および結論のミクロ構成を考察する。

まず、結論にダロウが使用されている母語話者の意見文のマクロ構成と、学習者の意見文のマクロ構成は、いずれも序論で論題の提示や背景説明、問題点の指摘などを行い、本論で論題についての長所と短所（または、いじめの状況や現状）を述べ、結論で書き手の立場や主張を述べており、大きな相違はない。

しかし、結論のミクロ構成には違いがみられた。母語話者の意見文では、結論で立場表明を行うだけでなく、書き手の意見に対する反対意見を考慮した譲歩、反論、書き手の立場の再確認などを行っており、それらの文にダロウが使用されていた。譲歩、反論、立場の再確認のいずれの文においても、配慮表現としてのダロウの使用によって、命題内容への書き手のコミットメントを弱め、読み手にとって結論を受け入れやすくなるようにしていることがうかがえる。

(10) は、本論で国際会議での英語使用の長所と短所を述べたのちの結論である。まず立場表明をした後、譲歩を示した上で反対意見への反論を行っている。(11) は、本論で英語が国際会議での共通語になった場合の短所を詳述し

た後の結論である。まず書き手の立場表明、次に書き手の立場をとった場合の問題点を述べた上で、書き手の立場の再確認を行う文にダロウを使用している。

(10) 以上を踏まえての私の意見は、「国際的な会議では、英語を使った方がいい」という意見に対して反対であるというものである。確かに、効率を考えるなら英語を共通言語にしておくべきだろう。だが、短所として挙げたように、論点とは関係の無い部分で会議における優劣が決まる可能性が排除できない以上、時間をかけてでも参加者達は各自の自信のある言葉で語り合うべきであろう。(中略) 以上のことから、国際的な会議では、英語を使うべきではないと考える。

(11) よって、国際会議でもし一つの共通語を選ぶのであれば、英語を選ぶのが実現可能な手段の中で最も効率的であると言える。しかし、英語のみを使用すると、英語を介さずには会議に参加できないことになってしまう。そうすると、例えば英語ができない人や英語へ翻訳する手段を持たない人の意見は必然的に無視されることになる。少数意見であることや、英語という手段を持たないことは、その意見を聞かなくてもいい理由にはならない。

このように、英語を共通語として効率的に使用しつつ、英語以外で表現される意見を見落とさないような方策が必要になるだろう。

坪根・田中(2015)では、「いい構成」の要因の一つとして反対の立場のメリットを挙げた上で反論するという展開が挙げられているが、母語話者の意見文ではそのようなミクロ構成を作る際にダロウが使用されているとわかった。

一方、学習者の意見文の結論では、譲歩や反論の文などがあるのは3編だけであり、そのほかは、書き手の意見だけのものが2編、書き手の意見とその補強だけのものが10編、結論がないものが1編であった。

(12) は学習者の意見文の結論である。結論を構成する文のすべてが「国際的な会議で英語を使ったほうがいい」という書き手の立場の補強をするもので、反対意見を考慮したことがうかがえる文はみられない。

(12) しかし、英語は世界中で一番普及する言葉という事実も否定できない。より幅広い知識や研究などが得られると交流できるために、共通な言葉を使わなければならないのではないだろうか。文句を言うより、もっと英語力が向上するように頑張ったほうが良いと思う。よって、私は国際的な会議では英語を使ったほうが良いという意見を賛成だと思う。

以上のことから、母語話者と学習者の結論におけるマイクロ構成の違いが、ダロウの使用状況の相違につながっていることが示唆された。

ここまでの考察により、母語話者は本論と結論においてダロウの用法を使い分けており、本論では自らの意見を補強する文に断定表現の用法を使用し、結論においては反対意見を考慮した文に配慮表現の用法を使用する傾向があるとわかった。学習者に対しこの2つの用法を示すことが、「と思う」の多用を回避しつつ、適切にダロウを使用し、説得力のある意見文を書くことにつながるのではないだろうか。

6 まとめと今後の課題

本稿では、意見文におけるダロウの意味・機能と用法を整理し、次にダロウが従来の日本語教材では十分に説明されてこなかったことを指摘した。そして、母語話者と学習者によるダロウの使用状況について、「と思う」の使用と比較しながら使用数、共起表現、文章構成の点から分析し、多用しがちな「と思う」の回避のしかたや意見文におけるダロウの使用文脈と用法について検討した。

ただ、収集したデータは学習者、母語話者とも16名分ずつであり、本稿の結果をただちに一般化できるものではない。今後さらにデータ数を増やして考察する必要がある。また、データや資料等を参照しながら論じるタイプの文章におけるダロウの使用のしかたは本研究の結果とは異なる可能性もある。これについても今後の課題としたい。

〈大阪大学〉

謝辞

作文資料を提供してくださった学生と教員の皆様、また、貴重なご指摘とご助言をくださいました査読委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

注

- [注1] …… 本稿では、「だろう」「であろう」という形態で出現する文末表現の総称として「ダロウ」とカタカナ表記で示す。
- [注2] …… 学習者の意見文データにおける文法等の誤りは訂正せずに掲載している。
- [注3] …… 本稿では、マクロ構成を田中・阿部（2014）にしたがい、「序論・本論・結論」という文章全体の構成と定義する。
- [注4] …… 本稿では、マイクロ構成を田中・阿部（2014）にしたがい、パラグラフ内の構成と定義する。1つのパラグラフには、1つのトピック・センテンスと、1つ以上のサポート・センテンスがあり、パラグラフの最後にコンクルーディング・センテンスがある。ただし、このコンクルーディング・センテンスは省略される場合もある。

参考文献

- 庵功雄（2009）「推量の「でしよう」に関する一考察—日本語教育文法の観点から」『日本語教育』142, pp.58-68. 日本語教育学会
- 伊集院郁子・高橋圭子（2010）「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ—日本・中国・韓国語母語話者の比較」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, pp.13-27. 東京外国語大学日本語教育センター
- 伊集院郁子・高橋圭子（2012）「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴—「主張」に着目して」『日本語・日本学研究』2, pp.1-16. 東京外国語大学国際日本研究センター
- 小森万里（2015）「中級以上の日本語学習者に対するアカデミック・ライティングのための日本語文法教育—引用動詞を用いた意見述べの文末表現をめぐって」『ヨーロッパ日本語教育』pp.303-308. <https://www.eaje.eu/media/0/myfiles/bordeaux/full.pdf>
- 田中真理・阿部新（2014）『Good Writingへのパスポート』くろしお出版
- 坪根由香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る—評価観の共通点・相違点から」『社会言語科学』18(1), pp.111-127. 社会言語科学会
- 友松悦子（2008）『中級日本語学習者対象 小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 日本語記述文法研究会（編）（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
- 日本語教材リスト編集委員会（編）（2016）『日本語教材リスト』No.45. 凡人社
- 野崎まり・岩崎裕久美（2014）「中国語母語話者の日本語の意見文に用いられる文末表現

- 一日本語話者・中国語話者の日本語意見文および中国語意見文を比較して』『神奈川大学言語研究』36,pp.45-67. 神奈川大学言語研究センター
- 蓮沼昭子 (2015) 「「であろう」は婉曲表現か—客観的真理追究型テキストにおける使用を中心に」『日本語教育連絡会議 (2014) 論文集』27,pp.18-27. 日本語教育連絡会議
- 牧原功 (2015) 「第5章 文末のムード形式とボライトネス—「だろう」の機能を中心に」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法・談話研究と日本語教育の接点』 pp.79-98. くろしお出版
- 宮崎和人 (2002) 「第4章 認識のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』 pp.121-172. くろしお出版
- 森山卓郎 (1992) 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101, pp.64-83. 日本語学会
- Hyland, K. (1994) Hedging in Academic Writing and EAP Textbooks. *English for Specific Purposes*, 13(3), pp.239-256.
- Hyland, K. (1997) Qualification and Certainty in L1 and L2 Students' Writing. *Journal of Second Language Writing*, 6(2), pp.183-205.